



生息地
港の母
ハチ ♀(推定8歳)



ハチ（真ん中）と子猫たち。子育て上手ではかの猫が育児放棄した猫までひきって世話をする。震災後もチョビひげ（♀・没）とともに港を動かなかった（撮影／田中良直）

瀕死の子猫
テルマ（生後2カ月）

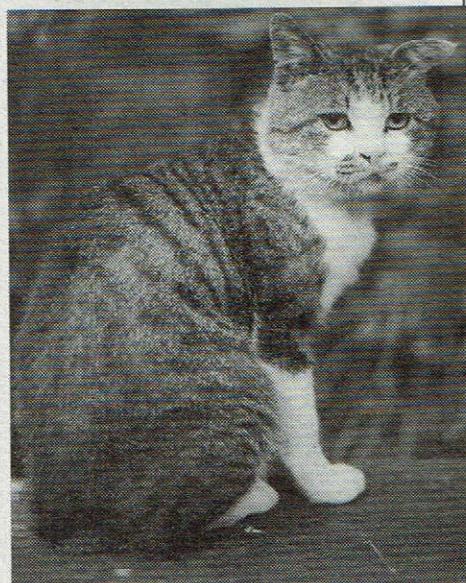


仁斗田港で瀕死のところをクレス先生に救出され、懸命の治療を受ける。その後の運命やいかに？



生息地
猫神社の猫神様
ネコ太郎 ♂(推定8歳)

実はブレーボーイで、大泊港に住む若い猫の多くはネコ太郎の子孫。最近は鳴くとエサをもらえることを覚えたが、耳が聞こえないために大音量で鳴き、近所迷惑に



「猫勝手」に生きられる この島が好き



田代島地図

人間ズレ

No.2251
題字 / 武田双雲

「猫島として注目され観光客も多く訪れるが、冬は寒風吹きすさぶ過酷な地。でもここには勝手に生き、そして死ねる自由がある。自由は大変だけど、ドイツからケアに来てくれるクレス先生がいるし、島の人も親切だからなんとかやっていけるんだ」

「こっち、こっち！ 子猫が、『すのこ』の下で衰弱してる！」
2015年8月末。宮城県石巻市田代島の仁斗田港に、女性の声が響き渡った。小雨がそぼ降る、少し肌寒い夏の終わりの午後のことだ。

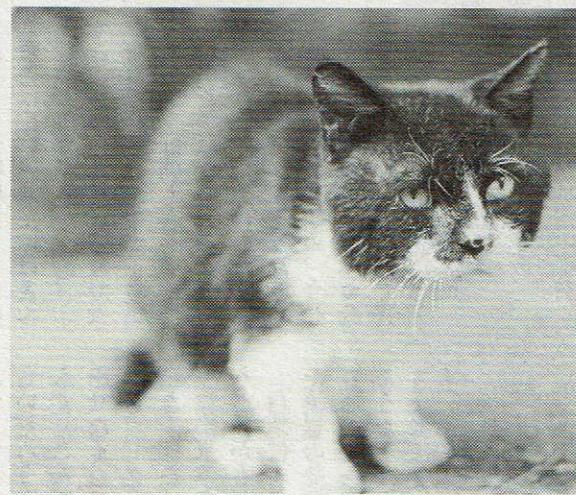
声の主は、ドイツ在住の獣医師、クレス聖美先生（62）。4年前の震災の後、彼女は2カ月に1度、この島にやってくる。地域猫のように、この島に暮らすワタシたち猫に、『すのこ』の下で衰弱してしまった子猫がいた。ボランティアで医療を施すためだ。すでに来島数は30回を超えた。

自己紹介が遅れたが、ワタシは、ここ田代島に住む猫「ハチ」（メス・推定8歳）。別名「港の母」とも呼ばれている。なぜそう呼ばれているかというと、8年間、ワタシは、この港を一歩も出ず、ここで100匹近くの子猫を産み、育ててきたからだ。今日は、ワタ



ドイツから治療に!
クレス聖美先生 ♀(62歳)

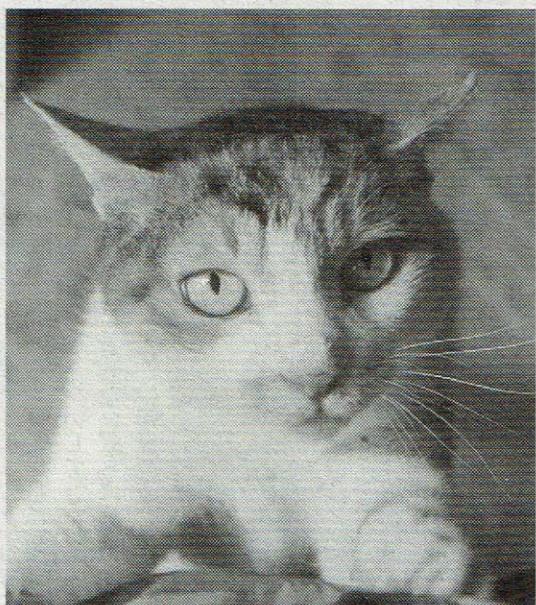
'79年渡米。ドイツで小動物病院を開業。自宅にも愛猫が3匹。震災後は2カ月に1度、ボランティアで田代島の猫たちのケアをするために来日している



生息地
島の長老
猫神社
ケンイチ ♂(推定9歳)

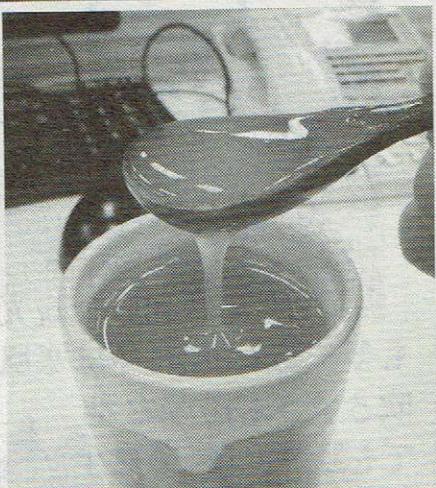
島の長老。最近は猫神社でネコ太郎たちとともに暮らしている

震災の影響で田代島にあすけられたあと、人になつかず何度も脱走。渡邊さんに出会えて安住の地を見つける。渡邊さんは彼女にメロメロだが、エミちゃんも、ほかの人間には見向きもしない



生息地
島の「魔性の女」
エミちゃん ♀(推定13歳)
渡邊さん家

●九州の美味しいもの、発見。



▲このトロトロの液体。こんな凄いものだとは。

口の中で、グリグリが止まらない!?

デスクで頂いたら…
嬉しい!こんなものがあったのか!?

今、「南九州産本くず湯」なるものが注目されている。
なんでも、「山々にある、自然の葛根(くずね)10kgから、300gしか採れない貴重な部分」を一部使っているとか。忙しかったが、先日、食べる時間があつたので、

しかも、「グリグリが止まらない」と表現したくなるほど!この感覚を味わいたい方、楽しみが多い年末に向けて、美味しい、天然の力を摂れる食に興味のある方は是非、巻末ページをご覧下さい。

卷末(最終ページ)
にて掲載。



シから見た、この島の猫と人間の「にゃん間模様」をお話ししようと思う。

田代島は、石巻から網地島ラインという船で約1時間歩いて2時間ほどで一周できる小さな島で、今は学校も病院さえもない。人口約60人に對して、猫は120匹以上。テレビ情報番組とやらでも「猫の島」として紹介され、震災死の子猫に話を戻そう。

クレス先生が叫ぶ声を聞きつけ、獣医学部の学生、金田泰弥君(24歳)がクレス先生の元に駆けつけてきた。まわりで様子をうかがっていた猫たちが驚いていっせいに散る。

「猫たちには、それぞれ物語があるんです」と話すクレス先生。ドイツに帰つても島の猫のことが気になるという

前は年間1万人以上の猫好きたちが訪れた。4年前の大島民1人が犠牲になつたが、島民たちは山に逃れて、ほとんど無事だった。

この島の漁港は、津波で大きな打撃を受けたので、ワタシたちも、毎朝もらつていた魚にありつけない日々が続いた。けれど、全国の人たちからの寄付で、ようやく漁港も復活の兆しを見せ始め、今じやワタシたちのエサの「カリカリ」も、寄付金の一部で買つてもらえるようになつた。

おっと、おしゃべりがすぎたようだ。港で救助された瀕死の子猫に話を戻そう。

「体が氷みたいに冷たい。もうダメかもしけないね……」白地に、こげ茶色が交じつた模様のその子猫は、もう生きるのをあきらめているかのようだ。金田君が、子猫の小さな胸に聴診器を押しあてながら、「がんばれ、がんばれ!死ぬんじゃないぞ!」と、声をかける。クレス先生が、子猫を抱きしめる。クレス先生が、子猫をタオルにくるむと、子猫はかすかに体を震わせた。

「タオルでこするだけじゃダメだ。畠山さんのところでお湯をもらおう!」

畠山の婆ちゃんは、70代半ば。この島の猫にとっては救世主のような存在で、朝夕欠

いつも島のパトロールに使っている5人乗りのバンに子猫を運び込み、急いで港を後にした。畠山さんは、仁斗田港から車で3分ほどの高台に住んでいる島民である。

「港で死にかけた子猫を見つけたんです。熱いお湯を洗面器に入れてもつけてもらえますか。子猫を温めなくて」

クレス先生は、畠山さんの家に着くなり玄関の引き戸をガラッと開け、中にいる畠山の婆ちゃんと、そう呼びかけた。

「ああ、クレス先生。ご苦労さま! 子猫? そりや大変」

ぬれた手をエプロンで拭きながら出てきた畠山の婆ちゃんは、クレス先生の腕に抱かれて息も絶え絶えの子猫を見ると、お湯をわかすため、すぐには台所に戻つていった。

畠山の婆ちゃんは、70代半ば。この島の猫にとっては救世主のような存在で、朝夕欠

かさず、家の前で猫たちにお手製のたまごチャーハンをふるまつてくれる。

「そんなものを猫にやって」と批判する人もいるようだが、畠山さん宅に集まつくる猫たちは、このたまごチャーハンが大好物だし、おかげで命拾いしてきたんだ。1分もしないうちに畠山の婆ちゃんが「用意できたよ」と言つて、湯をいっぱいに張った洗

人間ズーム

この夜クレス先生はケージに保護したテルマを泊まつてゐる宿に連れていき、一晩中看病した。しかし、翌日には島を離れなければならぬとはいへ、テルマを港に放すのは心配だ。

面器を玄関に持つて来た。
「ちょっと熱めだけど、これ
で温めましょう」
クレス先生は、手でお湯の
温度を確かめてから、そつと
子猫を湯につける。
「ニヤー————！」
今まで、意識がもうろう
としていた子猫が、にわかに
目を見開き、どこにそんな力
が残っていたのかと思うほど
力強い鳴き声を上げ、お湯の
中で手足をバタつかせた。
「よし、その調子じや。がん
ばれ、がんばれ！」

と、畠山の婆ちゃんも一緒にエールを送る。

見ていただけますか?」と、
テルマを託した。

「若いころ、爺ちゃんは出稼ぎに出でて、いまは爺ちゃんと2人。たちも中学進学から石巻に出てしまつたし、私は一人で留守を守つてきたの。寂しいときは、猫たちが慰めてくれた。この島の猫は、みんな私の子どもみたいなもんさ」

婆ちゃんはそう言うと顔をくしゃくしゃにして笑つた。

「猫をウチで飼わない」—去勢・避妊をしない「外から猫を持ち込まない」という3つの決まりがある。なるべく「自然の摂理」に従うのが、島のボリシーだからだ。なので婆ちゃんは猫を「飼つてはいない。でも、具合の悪い猫がいるときは、しばらく家に置いてくれるのだ。

「私も大の猫好きで、以前わら田代島には行つてみたかつたんです。だから、田代島の猫が心配で」（クレス先生）

その年の8月にこの島にやつて来て以来4年間、ドイツから2ヶ月ごとに、欠かさず田代島に通い続けている。

今では、島民たちから信頼されているクレス先生だが、

今では、島民たちから信頼されていいるクレス先生だが、最初は、「どうせすぐにならぬんだろう」と、冷やかに見られていた。2年たったところからだつたろうか。「この人の熱意は本物だ」と、クレス先生が島民から認められるようになつたのは――。

港で救助されたばかりの、溺死の子猫・テルマ。なんとか助けたいと、クレス先生と獣医学部の学生、金田君が必死に手当をしている



湯につかるたび、「ニャー!!」と大声で鳴いたテルマ。畠山さん宅で冷えた体を温めてもらい、少しずつ目に生命力が戻ってきた



朝タと猫たちに手作りのたまごチャーハンをふるまう畠山の婆ちゃん。「クレス先生のおかげで猫たちの健康状態がよくなつた」と話す

その分け目、 大丈夫?

薄毛治療は医療機関に
おまかせください。



スマホでも
ホームページをチェック!

早めの診断が大切です。

1人で悩まず、まずはご相談ください。
女性の発毛専門クリニックである“東京ビューティークリニック”は、いつまでも若々しく、美しくありたい女性をサポートいたします。「最近、抜け毛が増えた」、「髪のボリュームが減った」などのお悩みを、専門の医師がお聞きしますのでお気軽にご相談ください。

医療機関だから、安心して
治療を継続できます。

月々 **7,000 円**^(税抜)

からはじめる女性専用発毛治療

*別途診察料がかかる場合がございます。

東京ビューティークリニック

検索

0120-820-417

電話受付時間: 年中無休 / 9:00 ~ 21:00

完全予約制 相談無料 各種カード・医療分割取扱

全国37院最大規模

函館/札幌/青森/秋田/仙台/銀座/渋谷/新宿/秋葉原/池袋/品川/上野/大宮/横浜/柏/船橋/富山/名古屋/梅田/難波/神戸/京都/松江/福山/下関/松山/高知/福岡/佐賀/諫早/那覇

*効果にはすべて個人差がございます。※診療は全て自由診療です。

行動力と粘り強さは、彼女の過去をひもとけば納得できた。クレス先生は北海道大学の獣医学部を卒業したあと、'79年にペット先進国のドイツで獣医師の職を探すため、片道切符だけ買って飛行機に飛び乗った。渡独以来4年間は、一度も日本に戻らなかつた。

しかし、クレス先生のそんな情熱や動物に対する愛情を、ワタシたち猫は知るハズもない。大人になったハチの子、ワカハチ(右)とワカハチツー。2匹を捕まえているのは田代島の猫を撮り続けている写真家の田中良直さん

い。だから彼女が初めて島を訪れたとき、ワタシたちを捕まえて『注射』というものを、首筋にチクッと刺すものだから、もうビックリして、「へンな人間が来た!」と思いつタシたちは逃げまどつた。こうして、クレス先生の第一印象は「痛いことをする人」というサイアクなものとなる。

田代島には、「仁斗田」と、「大泊」^{おおどまり}という2つの集落があり、それぞれ港があるのだ

クレス先生は、いつも島を訪れると、まっさきに仁斗田港に来て、発育のよくない子猫や、風邪をひいて弱ついる子猫を見つけては、抗生素を注射したり、目薬をさしたり、栄養価の高いエサを与えないが、猫は風邪をひいて

100匹あまりの子猫をもうけ、毛色が

かは、彼女の姿を見るとササッと逃げていく始末。

「獣医師なんて損な役回りよ。こんなに猫が好きなのに、嫌われちゃうんだから」

クレス先生は、いつもこう嘆く。だけど、ワタシは知っている。先生がワタシたちの産んだ子猫を、ずいぶん助けてくれたことを――。

田代島には、「仁斗田」と、「大泊」^{おおどまり}

くけど、田代島の猫は平均3~4年。子猫は、10匹産んでも残るのは1~2匹だ。

「ノラ猫に延命処置をしたら、鼻がきかなくなるとエサを食べられなくなり衰弱して死んでしまう。とくに、冬の港は過酷で、海からの冷たい風が、容赦なくワタシたちの小さな体に吹き付け、体力を奪う。

家猫の寿命は10年以上と聞いて、田代島の猫は平均3~4年。子猫は、10匹産んでも残るのは1~2匹だ。

「ノラ猫に延命処置をしたら、鼻がきかなくなるとエサを食べられなくなり衰弱して死んでしまう。とくに、冬の港は過酷で、海からの冷たい風が、容赦なくワタシたちの小さな体に吹き付け、体力を奪う。

鼻がきかなくなるとエサを食べられなくなり衰弱して死んでしまう。とくに、冬の港は過酷で、海からの冷たい風が、容赦なくワタシたちの小さな体に吹き付け、体力を奪う。

「過酷な環境のなかで生きる猫たちだからこそ、せめて命を守っているわけではない。

ある間は、少しでも痛みや苦痛を和らげてやりたい」

それが、クレス先生が、この島に足を運び続けるいちばんの理由だ。

猫神社の主・ネコ太郎。耳が聞こえないので、鳴き声がつい大音量に。鳴けばエサがもらえると知り、必死に鳴く

100匹あまりの子猫をもうけ、毛色が

かは、彼女の姿を見るとササッと逃げていく始末。

「獣医師なんて損な役回りよ。こんなに猫が好きなのに、嫌われちゃうんだから」

クレス先生は、いつもこう嘆く。だけど、ワタシは知っている。先生がワタシたちの産んだ子猫を、ずいぶん助けてくれたことを――。

田代島には、「仁斗田」と、「大泊」^{おおどまり}

くけど、田代島の猫は平均3~4年。子猫は、10匹産んでも残るのは1~2匹だ。

「ノラ猫に延命処置をしたら、

鼻がきかなくなるとエサを食べられなくなり衰弱して死んでしまう。とくに、冬の港は過酷で、海からの冷たい風が、容赦なくワタシたちの小さな体に吹き付け、体力を奪う。

家猫の寿命は10年以上と聞いて、田代島の猫は平均3~4年。子猫は、10匹産んでも残るのは1~2匹だ。

「ノラ猫に延命処置をしたら、

鼻がきかなくなるとエサを食べられなくなり衰弱して死んでしまう。とくに、冬の港は過酷で、海からの冷たい風が、容赦なくワタシたちの小さな体に吹き付け、体力を奪う。

鼻がきかなくなるとエサを食べられなくなり衰弱して死んでしまう。とくに、冬の港は過酷で、海からの冷たい風が、容赦なくワタシたちの小さな体に吹き付け、体力を奪う。

「過酷な環境のなかで生きる猫たちだからこそ、せめて命を守っているわけではない。

ある間は、少しでも痛みや苦痛を和らげてやりたい」

それが、クレス先生が、この島に足を運び続けるいちばんの理由だ。

増えすぎて困るのではないか」という声も聞こえてくるらしいが、クレス先生は延命処置をしているわけではない。

「過酷な環境のなかで生きる猫たちだからこそ、せめて命を守っているわけではない。

ある間は、少しでも痛みや苦痛を和らげてやりたい」

それが、クレス先生が、この島に足を運び続けるいちばんの理由だ。

増えすぎて困るのではないか」という声も聞こえてくるらしいが、クレス先生は延命処置をしているではない。

「過酷な環境のなかで生きる猫たちだからこそ、せめて命を守っているではない。

ある間は、少しでも痛みや苦痛を和らげてやりたい」

それが、クレス先生が、この島に足を運び続けるいちばんの理由だ。

増えすぎて困るのではないか」という声も聞こえてくるらしいが、クレス先生は延命処置をしているではない。

「過酷な環境

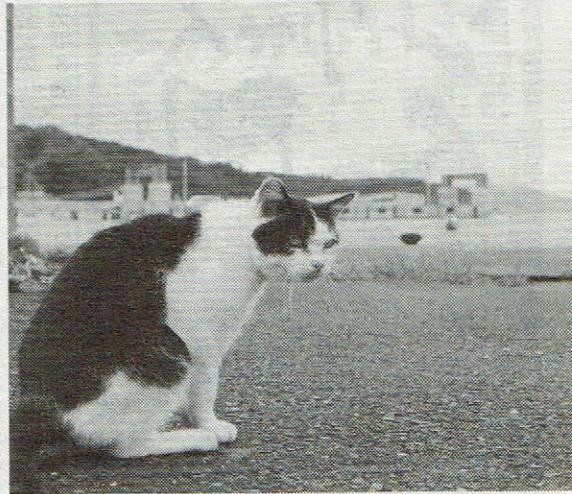
人間の小宇宙

猫で、べっぴんさん。人間なら70歳くらいだが、毛艶もよく気高さがあり、エメラルドグリーンの瞳は、やけに色っぽい。そんなエミちゃんだが、実はつらい経験をしている。エミちゃんは飼い猫だったが、震災後の諸事情により、保護された。当初エミちゃんは、人が近寄ろうとする「シ

ヤーフ」と威嚇して、かみつきとした。公民館から逃げ出して車のエンジンルームに隠れてしまい、島民たちが必死で救出したことも。その後、数軒のお宅を転々とするもなじめず、最後に預けられたのが渡邊さん宅だったのだ。

それまで決して誰にも心を開かなかつたエミちゃんが、仁悦さんと出会つて大きく変わつた。仁悦さんの膝に抱っこされ、ときには仁悦さんの顔や耳までペロペロなめたり、互いに見つめ合つたり。

やつと幸せをつかんだかに思つた矢先、仁悦さんが、ほのかの猫をかわいがつてしまつたが見つからない。そんなエミちゃんを発見したのが、島中あちこち搜してまわつたが見つからない。そんな



育児放棄した猫の子どもまで育ててきた「港の母」ハチ。すでに子育ては引退し、少し離れたところから、港の猫たちを見守っている

クレス先生だった。山の木立の陰にエミちゃんの姿を見つけておいで」と、呼びかけたが、エミちゃんは振り向くもしない。ところが、しばらくして仁悦さんが迎えに来て、「エミ、出ておいで」と声をかけたとたん、エミちゃんは素直に山から下りてきたのだ。

エミちゃんは、こうしてふたたび仁悦さんのもとに帰つた。あいかわらず、仁悦さん以外の人が頭をなでようすると、猫パンチを食らわせる。一方で、仁悦さんの膝の上に抱っこされると、上目遣いにとろけるような眼差しを向け死で救出したことも。その後、数軒のお宅を転々とするもなじめず、最後に預けられたの

が度邊さん宅だったのだ。

「あ、ハチだ、ハチがいた！」元気でよかつた！」

10月末。再び、この島を訪れたクレス先生は、仁斗田港でワタシの姿を見つけるなり、そう大声で呼びかけた。

青く晴れ渡つた空に、光が反射してキラキラと輝く海。しかし、吹く風はすでに冷たい冬に備えて長く伸び始めていた。クレス先生は、いつものように、子猫や、具合の悪い猫を見つけては、抗生素質を注射していく。

「救える命もあれば、救えない命もある。私が獣医師としてこの島でできることは、ほ

て甘え、手で仁悦さんの鼻先をちょんちょんと触つたりする。まるで、晩年で愛する人に出会えた喜びをかみしめたるかのようだ。

「もし、エミちゃんが亡くなつたら……」ある日、誰かが仁悦さんに、いつか訪れるであろう日の話をした。すると彼は、「エミは元気。最期なんて考へるべきじゃない！」と、語氣を強めたのがワタシの印象に残つている。

仁悦さんにとって、エミちゃんは、かけがえのない存在なのだろう。この島の猫は、人間がいなければ生きていけないが、人間もまた、猫がいなくては生きていけないのだ。

仁悦さんにとって、エミちゃんは、かけがえのない存在なのだろう。この島の猫は、人間がいなければ生きていけないが、人間もまた、猫がいなくては生きていけないのだ。

一方で、高齢になつた島民のなかには、生活の不便さから島を出る人も少なくない。一方で、高齢になつた島民のなかには、生活の不便さから島を出る人も少なくない。

この島に人がいなくなつたら、猫たちは生けていけないんだじゃないか

そんな心配の声も聞こえる。だが、命あるものの「生き死に」はすべて自然の摂理に基づいている。自然はときに過酷だが、その代わりに、自由もある。

生き物がありのままに生きられる、この田代島に感謝しながら、ワタシは「港の母」として、命ある限り、この地を守り続けよう。

（68）

8月に先生が島を去るとき

「救える命もあれば、救えない命もある。私が獣医師としてこの島でできることは、ほ

取材・文 和田秀子
撮影／五十川満